

千葉常胤生誕900年記念

平成29年度 千葉市・千葉大学 公開市民講座(平成三〇年二月三日)

千葉氏と日本中世のはじまり 千葉常胤生誕900年に寄せて一

千葉常胤の語られ方―軍記物語の世界から

千葉大学大学院人文科学研究院 准教授 久保 勇

【資料1】『徒然草』二二六段

後鳥羽院御時、信濃前司行長、稽古の誉れ有りけるが、樂府の御論議の番に召されて、七徳舞を二つ忘れたりければ、五徳の冠者と異名を付きにけるを心憂きことにして、学問を捨てて遁世したりけるを、慈鎮和尚、一芸ある者をば下部までも召し置きて、不便にせさせ給ければ、此信濃入道を扶持し給けり。

この行長入道、平家の物語を作りて、生仏といひける旨目に教へて、語らせけり。さて、山門のことをことゆゝしく書けり。九郎判官のことは詳しく知りて、書き載せたり。蒲の冠者の方はよく知らざりけるにや、多くのことどもも記し洩せり。武士のこと、弓馬の業は、生仏、東国の者にて、武士に問ひ聞きて、書かせけり。かの生仏が生れつきの声を、今の琵琶法師は学びたるなり。

【資料2】松尾葦江氏「いま欲しい平家物語論とは―自身への問いを携帯すること」

『リポート笠間』No.62笠間書院二〇一七・五

成立や古態論に関しても、じつは旧来の枠組みと新説とが擦り合わされずに、それぞれ通説として固定してしまつた現状がある。例えば読み本系的本文から十二巻本平家物語への移行過程について、また読み本系的本文が古態に関わるとするなら、読み本系を特徴づける頼朝拳兵記事はいつから平家物語の中にあつたのか等々、成立論には幾つもの穴が開いたままになっている。

【資料3】覚一本『平家物語』巻五「早馬」

同九月二日、相模国の住人大庭三郎景親、福原へ早馬をもつて申けるは、「去八月十七日、伊豆国流人前右兵衛佐頼朝、しうと北條四郎時政をつかはして、伊豆の目代、和泉判官兼隆をやまきの館で夜うちのうち候ぬ。其後土肥・土屋・岡崎をはじめとして三百余騎、石橋山に立籠て候ところに、景親御方に心ざしを存するものども一千余騎を引率して、おしよせせめ候程に、兵衛佐七八騎にうちなされ、おほ童にたゝかひなつて、土肥の相山へにげこもり候ぬ。其後畠山五百余騎で御方をつかまつり、三浦大介義明が子共、三百余騎で源氏方をして、由井・小坪の浦でたゝかふに、畠山いくさまけて武蔵国へひきしりぞく。その後畠山が一族、河越・稲毛・小山田・江戸・葛西、其外七党の兵ども三千余騎をあひぐして、三浦衣笠の城にをしよせてせめたゝかふ。大介義明うたれ候ぬ。子共は、くり濱の浦より船にのり、安房・上総へわたり候ぬ」とこそ申たれ。

【資料4】延慶本『平家物語』巻五・九「佐々木の者共佐殿の許へ参る事」

兵衛佐流され給ひて後、二十一年と申すに、此の院宣を給はりて、北条四郎時政を招き寄せて、「平家を追討すべき由院宣を給はりたるが、當時勢のなきをはいかがはすべき」と宣へば、時政申しけるは、「東八ヶ国の内に、誰か君の御家人ならぬ者は候ふ。上総介八郎広経、平家の御勘当にて、其の子息山城権守能経、京に召し籠められ候ひつるが、此の程逃げ下りて用心して候ふと承る。上総介八郎広経、千葉助経胤、三浦介義明、此の三人を語らばせ給へ。此の三人だにも随ひ付きまゐらせ候ひなば、土肥、岡崎、懐鳴は、本より志思ひ奉る者共で候へば、参り候はんずらむ。《中略・従わない一族に言及》**広経** **経胤** **義明** 是等三人だにも参り候ひなば、日本国は御手の下に思し召すべし。」と申しければ、其の言実ありて、其の舌弁有りければ、頼朝深く信じてけり。時政若し天の時を知るか、将又兵の法を得たるか。其の詞、一事として違ふ事なかりけり。

【資料5】『源平盛衰記』巻十九「兵衛佐催家人」

サテ北条ヲ召テ、「平家追討ノ院宣ヲ給リタレ共、折節無勢也、イカバズベキ」ト宣ヘバ、時政悦申ケルハ、「東八箇国ニハ、党モ高家モ大名小名、君ノ御家人ナラヌ者ヤハ候。去共平家世ヲ取ニ依テ、暫身命ヲ続ントテ一旦平家ニ相従計也。思召立給ハ、誰カ参ザラン。就中今タヨリヲ得タリト覚ユル事ハ、伊藤右衛門尉忠清被_レ配_レ流上総国」ノ時、介八郎広常、志ヲ尽シ思フ運テ、賞翫シ愛養スル事甚シ。而ニ忠清厚免ヲ蒙テ上洛後、忽ニ芳恩ヲ忘テ還テ阿党ヲナシ、広常ヲ平家ニ讒テ所職ヲ奪トスル間、子息能常参洛シテ子細ヲ申トイヘ共、猶広常ヲ召間、含_レ憤恨ヲナス折節也。甘言ヲ以テ召レンニ、是能隙ナリ。

千葉介経胤・三浦介

義明ハ、其性有_レ義不_レ戻、其心有_レ信不_レ頑。為_レ一族之長、已為_レ衆兵之首。何奉_レ背_レ真旧之主、豈可_レ与_レ違勅之賊_レ乎。早被_レ遣_レ専使、院宣之趣ヲ可_レ被_レ仰合。土肥・土屋・岡崎ノ輩ハ元来給仕シ奉ル上ハ、広経・経胤・義明三人御方ニ参ナバ、八箇国之輩縦アヤブム心アル者多ト云ドモ、皆身ノ勢ナケレバ、一人拔出テ背奉ラント仕者有_レベカラズ。八箇国帰伏シ奉ラバ、北国西国ノ輩手ヲ降、参ゼン事疑ナシ。

【資料6】『奉公初日記』（野田文書）

（第一紙2オ1）仁安元年／丙戌十月、太郎定綱・三郎盛綱生年十六／さいにおよびて云、「我等が一門、久章王ニ召仕テ私／しうをもたざりき。《中略》大庭三郎・畠山庄司・北山田別当、天なる物共にて、みな平家多まいれり。不参／又ちばのすけ・三浦介・上熊介等ハ風ニしたがう／木草のごとくにて、あながち奉公いたさずとも／きかず。秀義平家参たらんには、などか蒙御恩をも、／近江国多も返ざらん。

（第一紙3オ3）定綱申「仰のむね、返々すゞしく目出たく候。／秀義是にていふかなくならせ給候はん事／を思てこそ、みちの国多も入給候へとは申候へ。《中略》但三浦介ハ定まいり給へと存候。ちばのすけをよく／かたらはせ給

へと存候。上熊の介、人讒言によて、度々めし候へども、京に召籠られて候けるが、此程へ逃下たるよし／うけ給り候。心うかれて候へバ、よく／かたらはせ給て、／めし候へバ、うたがひなくまいり候はんずらん」と申。

【資料7】延慶本『平家物語』巻五・十二「兵衛佐、国々へ廻文を遣さる事」

実平、「先づ国々の御家人の許へ、廻文の候ふべきなり」と申しければ、「尤もさるべし」とて、藤九郎盛長を使にて廻文を遣はさる。先づ相模国住人、波多野馬允康景を召しけれども、参ぜず。上総介八郎広経、千葉介経胤が許へ、院宣の趣を仰せ遣はしたりければ、「生きて此の事を承る、身の幸にあらずや。忠をあらはし、名を止めむこと、此の時にあり」。昔、魯連、弁言して以て燕を退け、包胥、辞して以て楚を存せりき。盛長已に使節を戦術に全うして、三寸の舌を動かして、深く二人の心を蕩れければ、経胤等、威勢を興衆に振るひて、八国の兵を屈して、遂に四夷の乱を治めけり。夫れ、「弁士は国の良薬なり。智者は朝の明鏡なり」といへり。此の事、誠なるかなや。しかのみならず、昔の晏嬰は勇を崔杼に発し、程嬰は義を趙武に顕せりき。今の経胤等、頼朝の為に忽ちに旧恩を報ふ。遂に新功を立て、誉れを四方に彰し、名を百代に奮へり。かやうに喜ひ存じければ、左右無_レ領状申したりければ、各急ぎ馳せ向はむとしけれども、渡り余たありて、船筏に煩ひ多かりければ、八月下旬の此ほひまで、力及はず遅参す。

【資料8】長門本『平家物語』巻十

実平、まつ申けるは、「国々の御家人のかたへくはいぶん候べきなり」と申ければ、「尤もさるべし」とて、藤九郎もりながを御つかいにて、くはい文をつかはさる。先相模の国住人、はたのゝ小次郎むまの允信景を召れけれども、まいらず。さの介ひろつね、千葉の介つねたね、左右なく領状申たりけれども、わたりあまたありて、八月下旬のことなれば、風波の難によてちさむす。

【資料9】『源平盛衰記』卷二十「佐殿大場勢汰」

藤九郎盛長其ヨリ下総ニ越テ、**千葉介**ニ相触タリ。院宣ノ案・御教書披見テ、「此事上総介ニ申合テ、是ヨリ御返事申ヘシ」トテ、盛長ヲ返ス。千葉介ガ嫡子太郎ハ生年十七ニ成ケルガ、折節鷹狩ニ出テ帰ケルガ、道ニテ盛長ニ行合タリ。互ニ馬ヲ引ヘテ対面シテ、「如何ニト問。盛長、「シカド」ト答タリ。小太郎不心得」思テ、盛長ヲ相具シテ館ニ帰、向レ父云ケルハ、「恐アル事ニ候ヘ共、院宣ノ上、御教書成侍ヌ。先度ノ御催促ニ參上ノ由御返事申サレヌ、其上、上総介ニ随タル非御身」。彼ガ參ラバマイラン、不參バ參ラジト仰候ベキ歟。全不レ可レ依「其下知」。只急度可レ參由御返事申サセ給フベシ」ト云ケレバ、賢々シク計者哉ト思テ、「実ニ可レ然」トテ、「可レ參」ト御返事申ケリ。其ヨリ**上総介**ニ相触ケレバ、「生テ此事ヲ奉ル、身ノ幸ニアラズヤ。忠ヲ表シ名ヲ留シ、此時ニアリ」トゾ申ケル。昔魯連弁言以退「燕、色胥單辞以存」楚。盛長已全「使節於戰術」、動「三寸之舌」、深蕩「二人之心」。経胤等振「威勢於興衆」、窟「八箇国之兵」、遂治「四夷之乱」ケリ。夫弁士ハ国之良葉、智者ハ朝之明鏡也トイヘリ、此事誠哉。各馳向ハントシケレ共、廻レバ渡アマタアリ、直ニハ海ヲ隔タリ。八月下旬ノ比ナレバ浪荒風烈シテ、心ノ外ニゾ遅參シケル。

【資料10】『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）九月六日条・九日条

六日 晩に及びて義盛帰參す。申して云はく、千葉介常胤と談するの後、參上すべきの由、**広堂**これを申すと云々。
九日 盛長、千葉より帰參して申して云はく、常胤が門前に至りて案内するのころ、幾程を経ず、客亭に招請す。常胤、兼ねてもつてかの座にあり。子息胤正・胤頼等は座の傍にあり。**常胤**具に盛長が述ぶるところを聞くといへども、しばらくは言を發せず、ただ眠れるがごとし。しかるに件の両息同音に云はく、武衛虎牙の跡を興し、狼喉を鎮めたまふ。緯の最初にその召あり。服応なんぞ猶子の儀に及ばんや。早く領状の奉を獻らるべしてへれば、常胤が心中、領状さらに異

儀なし。源家中絶の跡を興さしめたまふの條、感涙眼に遮り、言語の覃ぶところにあらざるなりてへり。その後盃酒ある次に、当時の御居所は、させる要害の地にあらず、また御囊跡にあらず。速かに相摸国鎌倉に出でしめたまふべし。常胤、門客等を相率して、御迎へのために參向すべきの由、これを申す。

【資料11】延慶本『平家物語』卷五十八「三浦の人々、兵衛佐に尋ね合ひ奉りし事」

兵衛佐は、使者を**上総介**・**千葉介**が許へ遣はして、「各急ぎ来たるべし。既に是程の大事を引き出だしつ。此の上は、頼朝を世にあらせむ、世にあらせじは、兩人が意也。弘経をば父とたのむ、胤経をば母と思ふべし」とぞ宣ひける。兩人共に元より領状したりしかば、胤経三千余騎の軍兵を率して、結城の浦に參会して、即ち兵衛佐殿を相ひ具し奉りて、下総国府に入れ奉りて、もてなし奉りて、胤経申しけるは、「此の河の鱗に大幕百帖計り引き散らし、白旗六七十流れ打ち立て打ち立ておかれ候ふべし。是を見む輩、江戸・葛西の輩、皆參上し候はむずらむ」と申しければ、「尤もさるべし」とて、其の定にせられたりけるほどに、案の如く、是を見る輩、皆悉く參上す。さる程に、程無く六千余騎に成りにけり。

【資料12】『源平盛衰記』卷廿二「大場早馬立・千葉足利催促」

兵衛佐ハ石橋山ヲ出テ後、三百余騎ニテ上総国府ニ著給フ。**千葉介**・**上総介**等方許へ使者ヲ遣スニ云、「平家追討事、依「蒙」院宣、可レ有「同心」之旨、先度被「相触」畢。可「參加」之由承伏之間、遂合戰於石橋之城郭」畢。遅參之条、頗不「得」其意。縦雖「為」私之復意、可「被」存「合力」之儀。況一院御定論明白也、旁以難「被」黙止一歟。所詮以「弘経」為「父」、以「胤経」憑「母」。頼朝知行天下「不併」在「兩人」之計」ト被「仰」タリ。本ヨリ領状ノ上也、千葉介胤経三千余騎ニテ急ギ杉浦ト云所ニ行向テ、ヤガテ兵衛佐ヲ相具シ、下総国府ニ奉「入」テユ、シク翫シ奉ル。胤経申ケルハ、「爰ニ大幕百帖バカリ引散シ、白旗六七十流打立候ベシ。是ヲ見聞シ輩ハ、『兵衛佐殿ニ大勢參ケリ』トテ、江戸・葛西ノ者共皆參ルベシ」ト

計ヒ申ケレバ、「然々キ」トテ、則胤経ニ仰テ其定ニ構タリ。

【資料13】『吾妻鏡』治承四年（一一八〇）九月十六日条

広常の参入を待たず、下総国に向はしめたまふ。千葉介常胤は、子息太郎胤正・次郎師常（相馬と号す）・三郎胤盛（武石）・四郎胤信（大須賀）・五郎胤道（国分）・六郎大夫胤頼（東・嫡孫小太郎成胤等を相具して、下総の国府に参会す。従軍三百余騎に及ぶなり。常胤、まづ囚人千田判官代親政を召覽せしめ、次に駄餉を献ず。武衛、常胤を座右に招かしめたまひ、すべからく司馬をもつて父となすべきの由仰せらると云々。常胤一の弱冠を相伴ひ、御前に進めて云はく、これをもつて用ゐらるべし。今日の御贈物なりと云々。

【資料14】『源平闘諍録』巻五・一「兵衛佐、坂東の勢を催す事」

治承四年九月四日、右兵衛佐頼朝、白旗差して五千余騎之兵を率して、上総の国より下総国へ発向す。爰に上総権介広常、右兵衛佐の御前に跪きて申けるは、「君は此の程の軍に疲れさせたまひしうへ、兵共も進み難くす。荒手の随兵を以つて広常先陣を仕らんと欲す。広常に相ひ随ふべき輩には、『中略・広常勢』を始めとして、一千余騎の兵を率して発向すべき」由を申す処に、千葉介常胤申しけるは、「権介の所望謂れ無し。他国は知らず、下総国においては他人の綺有るまじ。常胤先陣を仕るべし」とて、相ひ随ふ輩は、新介胤将、次男師常、同じく田辺田の四郎胤信、同じく国分の五郎胤通、同じく千葉六郎胤頼、同じく孫塚平次常秀、武石の次郎胤重、能光の禅師等を始めとして、三百余騎の兵を引率して、下総国へ打ち向かひけり。

【資料15】『源平闘諍録』巻一之上・一「桓武天皇より平家の一胤の事」

常兼が次男常重大権介。舎弟常康白井の六郎。同じく舎弟匝瑳の八郎常綱。其の子に常胤千葉大介、鎌倉殿の左の一座を給はる。

【資料16】『源平闘諍録』巻五・三「妙見大菩薩の本地の事」

然妙見大菩薩は、良文より忠頼に渡りたまひ、嫡々相ひ伝へて常胤に至りては七代なり」と申しければ、右兵衛佐此れを聞いて、「実に目出たく覚え候ふ。然らば聊頼朝が許へも渡し奉らんと欲ふ。云何が有るべきや」。千葉介答へて申しけるは、「此の妙見大菩薩は余の仏神にも似ず、天照大神の三種の神器の、国王と同じく居たまひてこそ、代々の御門を護りたまふが如し。此の妙見大菩薩も、将門より以来嫡々相ひ伝はり、寝殿の内に安置し奉りて、未だ別家へ移し奉らず。物恠しき不祥出で来らんとときは、宮殿の内騒動して化異を示し、示現し、氏子を護る靈神なり。一族為りといへども本躰は永く末子の許へは渡られず。何に況んや、他人においてをや。詮ずる所、常胤、君の御方へ参り向かつて仕へたるを、偏に妙見大菩薩の御渡り有ると思食さるべく候ふ」と申しければ、右兵衛佐頭を傾けて渴仰を致したまひしかば、侍共身の毛堅つてぞ思ひける。

【使用テキスト】※報告者によって適宜あらためた部分がある。（敬称略）

『徒然草』：久保田淳校注・岩波新日本古典文学大系39『方丈記・徒然草』岩波書店一九八九／覚一本『平家物語』：梶原正昭・山下宏明校注・岩波新日本古典文学大系44『平家物語上』岩波書店一九九一（底本・高野本）／延慶本『平家物語』：延慶本注釈の会編・『延慶本平家物語全注釈第二末（巻五）』汲古書院二〇一一（底本・大東急記念文庫蔵本）／長門本『平家物語』：麻原美子ほか編『長門本平家物語二』勉誠出版二〇〇四（底本・国立国会図書館貴重書本）／『源平盛衰記』：美濃部重克・松尾葦江校注・『源平盛衰記（四）』三弥井書店一九九四（底本・慶長古活字版）／『吾妻鏡』：黒板勝美ほか編・新訂増補国史大系『吾妻鏡第一』吉川弘文館一九七二・貴志正造訳注『全譯吾妻鏡二』新人物往来社一九七六／『源平闘諍録』：福田豊彦・服部幸造全訳注『源平闘諍録』坂東で生まれた平家物語上・下』講談社学術文庫一九九二・二〇〇〇（底本・国立公文書館蔵本）／『源平闘諍録』：野田文書』鈴木彰『平家物語の展開と中世社会』汲古書院二〇〇六